

無条件に見ることは愛と等しいのか？

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号 3224357

孫邏安／Lian SUN

無条件に見ることは愛と等しいのか？

Unconditional Seeing: Is It Equal to Love?

要旨：

本論文は「無条件に見ることは愛に等しいのか？」という核心的な問題を掲げ、哲学理論と芸術的実践を組み合わせることで、両者の関係と差異について探究したものである。無条件に見ることという行為は、判断を超越する倫理的な行為であり、個体の真実の姿を理解し、受け入れることに焦点を当てている。一方で、愛はより複雑で動的な実践行為であり、受容に加えて感情的なつながりや責任、さらに具体的な行動を含む。本論文では、無条件に見ることが愛の発生を触発する要素となることを指摘しつつ、その限界ゆえに、愛が必要とする双方向性や超越性を完全には満たせないことを論じている。

Lewis の『The Four Loves』、Fromm の『The Art of Loving』、そして Rogers の無条件肯定的関心の理念を分析することを通じて、本論文は、孤独と差異の中で愛がどのように生成されるのかをさらに明らかにしている。また、アニメーション作品『Holy Feces』を例として挙げ、愛は無条件に見ることに依存するものではなく、不完全な受容と継続的な実践の中でその意味が生まれることを示している。

本論文の最終的な提言として、愛とは矛盾を積極的に受け入れる選択であり、未完成性の中にその独自の価値を具現化するものであるとする。無条件に見ることは愛のきっかけとなるものの、愛は見ることをはるかに超え、人間関係における最も深遠で、かつかけがえのないテーマの一つとなっている。

1. 序論

芸術作品は往々にして、世界に対する観察と個人の内面を映し出すものである。私の一年次制作『Holy Feces』では、主人公が自分の欠点を他者（便器）に投影する過程を経て、徐々に自らの不完全さを受け入れるという物語が描かれている。この制作を通じて、私は次のような問いを抱くようになった。もし私たちがある人を完全に理解し、受け入れることができるならば、その行為は愛に等しいのだろうか？

無条件に見ることとは、判断を超越した行為であり、個体の真実の姿に焦点を当てたものである。しかしながら、愛という概念は極めて複雑であり、親密なロマンチックな愛だけでなく、友情、親情、無私の献身的な愛も含まれている。愛は単なる感情ではなく、動的で実践的な行為である。

本論文では、無条件に見ることと愛の関係およびその差異について探究し、以下の問いに答えることを目指す。無条件に見ことは愛と定義できるのか？もし定義できないのであれば、それは愛とどのような関係にあるのか？これらの問いは、人間関係における感情的な実践のみならず、人類がどのように差異と受容の中でつながりや意味を求めるのかという根本的な問題にも関わるものである。

2. 無条件に見ることの内涵

2-1. 無条件に見ることの本質

本論文において、無条件に見ことは単なる視覚的な行為ではなく、個体の本質を理解し、受け入れることである。それは主観的な投影や価値判断を排除し、真実の存在に向き合う行為を意味している。

無条件に見ることという行為は、単なる「その場の理解と受け入れ」とどまらず、静的次元と動的次元が交差する特性を持っている。その静的次元は、見られる側の真実の状態を受け入れることに現れており、これは「干渉しない」理解であり、個体の存在を尊重し、変えようとしめない態度である。一方で、その動的次元は、見る側が自らの主観性を絶えず反省し、投影や判断を排除しようと努めることで「真実」を見るに至る過程に表れている。このような静的次元と動的次元の交差によって、無条件に見ことは単なる存在の状態にとど

まらず、能動的に参加することを必要とする倫理的実践として位置づけられるのである。

2-2. 無条件に見ることの意味

無条件に見ることは、他者の行動や特質を基に判断するのではなく、存在そのものの価値を強調するものである。このような無条件性は、Marina Abramovic の作品『The Artist Is Present』において生き生きと体现されている。

Abramovic は、セルビア出身のパフォーマンスアーティストであり、「パフォーマンスアートの母」と称される人物である。彼女の芸術活動は、身体の限界、感情の境界、人間の存在そのものを探求することを中心としており、従来の芸術形式の境界を頻繁に挑発してきた。『The Artist Is Present』（Akers & Dupre, 2012）は、彼女を題材にしたドキュメンタリー映画であり、ニューヨーク近代美術館（MoMA）で開催された、3 か月にわたる展覧会の記録である。この展覧会では、アブラモヴィッチが静かに机に座り、目の前に座った観客一人一人と 5 分間無言で視線を交わすというパフォーマンスを行った。この持続的な凝視を通じて、アーティストと観客の間に言語や動作を超えた深い交流が生まれたのである。

この作品は、「見る」という行為を受動的なものから、積極的な感情的実践へと転換した。観客はアブラモヴィッチの視線を受けの中で、無条件の受容を感じる。この受容は、彼らのアイデンティティ、行動、あるいは価値判断に基づくものではなく、彼らが「個」として存在していることだけに焦点を当てたものである。Abramovic はその凝視によって観客の防御を剥ぎ取り、彼らが自分の存在から逃れることを許さなかった。このような凝視は、時に暴力的ですらある。この赤裸々な凝視は、参加者が自己を開き、深く内省し、自らの主体性を目覚めさせる契機となった。そして、参加者は自身の存在と価値を確認することができたのである。

展覧会の後半において、Abramovic は、自身が環境と一体化したような、ほぼ完璧な体験を得たと語っている。パフォーマーとしての視点から見れば、彼女は個としての存在を超越し、環境の一部となり、全体的な存在感を感じたのである。

たとえ一部の評論家が『The Artist Is Present』を自己顕示的なナルシズムの作品と見なしたとしても（Saltz, 2010）、それは問題ではない。私は、この作品において彼女と観客が互いに鏡となり、個々の真実の本質が明らかにされたと考える。Abramovic の凝視の中で、アーティストと観客は身体が存在を通じて共有の「場」を形成した。この場では、無言の凝視が「見る」という行為を受動的なものから動的な存在のあり方へと変えたのである。

このような動的実践の中で、無条件に見ることは主体性を喚起する行為へと昇華したのである。

2-3. 無条件に見ることの限界

しかし、この「無条件性」は完全に実現可能であろうか。Sartre は、個人の主観性は決して消し去ることができないと指摘しており（Sartre, 1943）、また、Levinas は、他者の受容が触れることのできない差異性に基づいていると述べている（Levinas, 1961）。これらの見解は、無条件に見ることが単なる倫理的理想に過ぎず、現実においては常に主観性と限界が存在することを示している。さらに、この「無条件性」がすべての判断を排除した場合、他者の行為に対する無条件の寛容を助長する可能性があり、倫理的責任の境界を曖昧にする危険性を孕んでいる。

したがって、無条件に見ることの緊張点は、主観性を克服する必要がある一方で、人間固有の偏見を完全に排除することができない点にある。

無条件に見ることはその倫理的価値を持ちながらも、実践においては常に人間の主観性に制約される。このような制約は、愛の実践性をさらに探究するための手がかりを提供しているのである。

3. 愛の内実

3-1. 愛の多様性

Lewis は著書『The Four Loves』において、愛を親情（*storge*）、友情（*philia*）、ロマンチックな愛（*eros*）、そして献身的な愛（*agape*）の四つに分類している（Lewis, 1960）。特に献身的な愛（*agape*）は、利己的な欲求を超越し、すべての生命に対する普遍的な関心を象徴する無私の愛と見なされている。

一方、Fromm は愛を能動的な実践行為と定義し、それを個人の成長や孤独の問題を解決する手段と捉えている。彼は、成熟した愛は融合を目指しながらも、個々の独立性を保持することを強調している。この成熟した愛は未成熟な愛と異なり、依存、支配、所有といった形で表れることはない。Fromm の主張によれば、愛は学ぶべきスキルであり、個人の利益を超越する感情的な実践であるとされる（Fromm, 1956）。

これらの理論は愛を定義しようと試みているものの、愛の複雑性を完全に包括しているわけではない。例えば、Lewis の分類は明確すぎるため、現実における愛の混合的な性質を見落としている。一方、Fromm の実践的定義は愛の動的な側面を強調しているものの、愛における感情の流れや瞬間的な特質について十分に論じているとは言えない。

愛は単一の実践や分類として捉えられるものではなく、むしろ多様な感情や行動を取り入れながら、絶えず発展するプロセスと考えられる。

3-2. 愛と感情の関係と超越

愛とは動的なプロセスであり、その表現形式はしばしば感情そのものを超越するものである。愛の体験は往々にして瞬間的なものであると考えられる。例えば、誰かに認められたときの喜び、理解される中で生まれる共鳴、一体感の中に感じる温かさなどが挙げられる。これらの瞬間は孤立して存在するものではなく、時間、相互作用、記憶を通じて累積され、動的な関係のネットワークを形成するものである。そのため、愛は単なる感情の一側面にとどまらず、むしろ複雑な累積的プロセスといえる。

愛は、感謝、理解、つながり、一体感、利他、自発性、自由といった特質をさまざまな状況下で表現する。しかしながら、愛はこれらの特質の単純な総和ではなく、一種の動的な統一体である。それは、ある時には感情の自発性として現れ、また別の時には自己や他者を超越する実践として表れる。この複雑性のゆえに、愛は単一の定義に収めることは難しいが、それは決して愛を完全に定義できないことを意味するわけではない。

愛は、方向性を持った動的なプロセスとして理解することができる。それは単なる感情的な反応を超え、関係と意味を継続的に構築する行為へと向かうものである。

3-3. 愛と孤独

私は、愛とは孤独を完全に消解するものではなく、人と人との間に永遠に隔たりが存在することを認めるものであると考える。たとえば、すべての人がそれぞれ孤島のような存在であり、孤独は愛の前提である。愛とは、二つの独立した個体の上に成り立つ終わりのない「近づき」であり、それは他者の視点を理解しようと試みながら、距離を縮めつつも互いの独立性を保持し続ける行為である。たとえば、私たちは他の島が見ている風景を見ようと努めるが、全く同じ景色を見ることはできない。

孤島という比喻は、愛が永遠に完成しない「近づき」であることを示唆している。このプ

プロセスには、孤独の認識と、それへの抗いの両方が含まれる。この「近づき」とは単なる融合ではなく、動的な緊張を伴うものである。それは、個体が互いの違いと限界を認めつつも、理解とつながりの可能性を創出する努力を要求する。この近づきは直線的に進展するものではなく、理解と受容を繰り返し試みることで成り立つ動的なプロセスである。まさにこの孤独と緊張の中で、愛は現れるのである。

Fromm の見解もこれを裏付けている。愛は孤独の問題を解決する一つの方法である。個体が自らの孤独と限界を意識したとき、初めて成熟した形で融合とつながりを選択することが可能になる。この選択は単純な受容や理解ではなく、超越的な行為なのである。

3-4. 愛の理性と実践性

言語は、愛の体験と選択において重要な役割を果たしている。言語は愛を記述するだけでなく、愛を形作るものでもある。私たちは「愛の定義」によって自らの感情的な志向を調整しようと絶えず試みる。たとえば、言語が愛を「利他」や「自由」として描写するとき、それは私たちが愛における無私性や開放性により注目するよう導く。一方、言語が「依存」や「ニーズ」に焦点を当てるとき、愛は自己の感情的なニーズを満たす方向に傾きやすくなる。

しかし、言語の限界は愛のもう一つの側面を明らかにする。それは、愛がしばしば理性的な記述の枠組みを超えているということである。愛は完全に言語によって定義されるものではなく、むしろ実践的な選択である。それは、どのように感じ、行動し、他者との関係を構築するかを選ぶ行為である。この選択性によって、愛は単なる感情や理念ではなく、動的な行為として成立するのである。

4. 無条件に見ることと愛の関係

4-1. 両者の交錯する点：受容とつながり

無条件に見ることと愛は多くの側面で共通点を持っている：

受容：無条件に見ることは判断を取り除くことで個人を受容することを可能にする。一方で、愛はこの受容を基盤とし、感情や実践の領域へと広がっていく。しかし、受容は完全な融合を意味するわけではない。Fromm が述べたように、愛は受容の中において差異を維持

する必要がある。この差異こそが、愛に継続的な「近づき」の可能性をもたらすのである。

つながり：両者は人と人の間に存在する隔たりを越え、より深い関係を築こうとする点で共通している。

孤独の承認：無条件に見ることと愛は、孤独や隔たりを認めることを基盤としている。この承認こそが「近づき」の可能性を開くのである。Fromm は『The Art of Loving』において、愛とは人類が生存に関わる問題、すなわち孤独を解決する手段であると述べている。真の愛には、関心、責任、尊重、そして理解が含まれる。これらの次元は、愛と無条件の「見ること」の交点を明らかにしている。両者はともに他者の本質に焦点を当てることを強調しているのである。

4-2. 両者の違い：行動と感情

情感：無条件に見ることという行為は、感情を伴わない純粋な受容として機能する場合がある。一方で、愛は深い感情的なつながりをその本質として持つことが多い。こうした差異は、一つの矛盾を浮き彫りにする。すなわち、見ることにおける客観性と、愛における主観性は、果たして真に融合し得るのだろうかという問いである。

感謝（Appreciation）：著名な心理学者 Carl Rogers は、無条件の積極的関心（unconditional positive regard）という理念を提唱し、無条件の愛は「受容」「理解」「欣賞」の三つの次元を含むと述べている（Rogers, 1957）。無条件に見ることは理解と受容の段階に留まる可能性があるが、愛は「感謝」の次元を含む点で異なる。それは他者の行動、特質、価値を積極的に認めること、すなわち「価値を認めて祝福する」という行為である。この感情は単なる尊敬や感銘を超えたものであり、たとえば他者に対して「あなたはそのまま素晴らしい」と伝えるとき、この「感謝」が表現されているのである。

「感謝」の核心的な内涵は、単純な受容を超えて、情感的な触発や価値判断を含む点にある。受容は主に存在そのものを包容し、尊重する行為を指すが、感謝は他者の独自性の中にある美しさを発見し、肯定することである。これは個人の本質への認知と肯定に焦点を当てるものである。本稿において、「感謝」と無条件に見ることの最大の違いは以下の点にある：無条件に見ることは受容を強調し、必ずしも情感的であるとは限らないが、「感謝」は他者の独自の価値や特質を認める積極的な情感実践である。この次元の追加によって、愛は単なる倫理的行為を超え、情感に基づく深い体験へと昇華するのである。

動的な「外向き」と「内向き」：無条件に見ることの静的および動的特性と、愛の動の実

践との間には明確な違いが存在する。無条件に見ることにおける動的性質は、主に内向的な自己反省として現れる。すなわち、「見る側」は自己の投影や偏見を克服する必要がある。一方で、愛には外向きの実践的行為が含まれる。たとえば、責任や思いやり、相互作用を通じて、関係の維持や発展を目指す行為である。

この違いは、無条件に見ることが理解と受容の次元に重きを置いているのに対し、愛は受容を超えて、他者のニーズへの応答や未来への約束を強調することを示している。たとえば、作品『Holy Feces』（Sun, 2025）において、主人公の行為は単なる外向きの投影から、自己との最終的な和解へと移行する。この和解は、過去の反省に留まらず、未来に向けた行動の超越的な表現でもある。このことは、愛が本質的に実践的な選択であり、無条件に見ることの静的な次元にとどまらないことを示している。

4-3. 接続

無条件に見ことは、愛の動的な発展における引き金となる。それは他者に近づく可能性を私たちに開くが、愛の本質を構成するものではない。無条件に見ことは倫理的な姿勢であり、愛は超越的な実践である。愛は見ることを超えて、差異の中でつながりを構築していく必要がある。この構築は、見ることの完全性に依存するのではなく、限界や矛盾の中で積極的に近づくという選択に由来する。

無条件に見ことは、愛の引き金となり得るが、愛は見るという行為を超えた実践的な選択に基づいている：

受容から思いやりへ：見ることは理解であり、愛は行動である。他者のニーズに応えることを含む。

観察から約束へ：無条件に見ことは一つの態度であり、愛は継続的な選択である。

これにより、無条件に見ことは愛と同じではないものの、愛に必要な基盤を提供することが示される。愛は見ることの延長であり、受容の基盤に基づく積極的な実践である。王恒教授が述べたように、「理解とは知的な活動であり、すべての理解は自発的な服従としての愛に依存する」（王, 2025）。その核心は他者の論理を完全に掌握することではなく、つながりを求める欲望に自発的に従うことである。「あなたを理解する」と言うとき、それは「あなたを完全に知っている」という意味ではなく、「この瞬間、私はあなたと共に立ちたい」という意志の表明である。

5. 一年次制作分析

5-1. 排泄物と便器のメタファー

私の一年次制作である『Holy Feces』では、排泄物は単なる排出物ではなく、個体の暗部や社会的な周縁性を象徴している。「排泄物」は社会において常に汚いもの、不要なもの、同質的な社会における異質性の象徴とされてきた。同様に、この作品において排泄物は抑圧されたもの、そして切り捨てられた「自己」の一部を示唆する。

便器はこの作品の中で「恋人」の役割を担っており、主人公は便器が排泄物を飲み込むという行為を通じて、自らの暗部、すなわち「自己」の一部を受け入れることで「愛」を確認している。主人公は自分の欲望を他者に投影し、恋人の視線を通じてより理想的な自己を回顧的に見出そうとしている。この行為の本質はむしろ自己愛に近いと言える。便器は無条件の受容を象徴し、判断を加えない初期的な愛を表現している。

しかし、便器が排泄物を受け入れ続けることができなくなったとき、主人公は長期間抑圧されてきた「暗部」と向き合わざるを得なくなり、真の自己と対峙することになる。このプロセスは、無条件に見ることと愛の差異を示している。無条件に見ることは受容の基盤を提供するが、愛の実践に必要な動性的性や責任感を担うことはできない。愛は単に理解するだけでなく、他者のニーズに応える行動を通じて、単なる受容を超越することが求められる。

5-2. 排泄物を飲み込む行為：無条件の受容から愛の動的实践へ

断水後、主人公は外部に助けを求めるが、何度試みても失敗に終わる。この時、主人公の「捨てられた自己」は行き場を失い、最終的に彼は自らの排泄物を飲み込むことを選択する。この行為は、自我統合を象徴すると同時に、本能的な「飲み込み」の衝動を伴っている。それは孤独に対する極端な対処法であり、自己の受け入れが不可能だった部分を完全に受け入れるという行為でもある。この行動はある意味で自己愛の極端な形態であり、「自己の暗部を飲み込む」ことで、自身の全体性への認識を果たしている。

この行為は、主人公が外部からの受容への依存から、自らを受け入れる方向へと移行したことを示しており、愛が成熟した選択として持つ動的な特性を表している。主人公はこの過程を通じて「未成熟な愛」（依存と投影）から「成熟した愛」（自我の統合と超越）への転換を成し遂げたのである。排泄物を飲み込む行為は、愛の再定義でもある。すなわち、愛とは単に他者との関係性に留まらず、自我の完全性を追求する行為でもあるということである。

る。

5-3. 破壊と回帰：愛が無条件の受容を超えるとき

最終的に、主人公は排泄物に囲まれ、便器と共に破壊される。この場面は、個体の存在が消滅する象徴であると同時に、生命の全体性を認識する行為でもある。排泄物は暗部としてではなく、生命の循環の一部として再定義される。主人公が排泄物の中で安らぎと充足感を覚える様子は、まるで母親の子宮に戻ったかのようなものである。主人公は「ママ」と呟き、この呼びかけによって愛は個体、母性、そして宇宙全体の究極的な配慮と結びつけられる。この愛は、個体や関係性の枠を超え、生命の根源への認識となり、自我と宇宙の一体化を追求する表現である。この破壊は孤独の終焉であり、自我と世界との究極的な融合でもある。

このような物語において、主人公は苦痛と和解を経験し、愛は単なる受容を超えて、存在そのものの探求と実践へと進化する。愛を通じてこそ、人間は孤独の中で繋がりを創造し、差異の中で超越的な充足を追求することができるのである。

6. 展開と総括

無条件に見ることと愛の関係は、容易に解決できる命題ではない。無条件に見ることが他者に近づく倫理的な出発点を提供する一方で、それは愛の本質的な要求を真に満たすことはできない。愛は無条件に見ることを基盤とするものではない。なぜなら、見ること自体が完全に無条件であるわけではなく、主観的な選択を伴うからである。さらに重要なのは、愛には完璧な「見ること」は必要ないということである。愛は完璧さを拒絶する概念であり、人間の不完全さ、隔たり、孤独を前提とし、矛盾の中で自らの存在意義を見出すのである。私の考えでは、愛とは他者の受容よりも、差異と矛盾を積極的に抱擁することに近い。愛は選択であり、無条件性や完璧性を拒絶しつつ、人間関係に真実の重みを与えるのである。

愛は複雑で動的なものである。愛は、受容、相互作用、責任の実践を通じて、差異の中で繋がりを創造し、孤独の中で近づこうとする。こうした近づき方は線形的に完了するものではなく、永遠に未完成の動的過程である。この未完成性は愛の弱点ではなく、愛の根本的な特質である。この特質ゆえに、愛は人間関係において最も深く、最も代替不可能なテーマとなるのである。

この観点から見ると、無条件に見ることは愛にとって必須ではなく、むしろ愛の誤解を招くものであるかもしれない。愛は「完全な理解」ではなく、「理解しないことを認める」知恵である。愛は隔たりを解消することではなく、その隔たりの中で大胆に近づくことにあ
る。この近づき方は、見ることによってではなく、むしろ人間の不完全さによって、私たちが互いに必要とするからこそ成り立つのである。何度も試み、失敗し、また出発することが求められるのだ。

したがって、私は無条件に見ることが理想的であるとは考えず、それはむしろ偽の命題である
と考える。愛は「見ること」を超越しており、その本質は深い行動であり、全てを見通すことができない中で前進し続ける勇氣である。愛は矛盾を完全に解消することにあるのではなく、その矛盾を人間関係の本質として受け入れ、その矛盾の中で新たな意味を創造することにあるのである。

文献

- ・ 王恒 (2025)「愛についての哲学的考察」『哔哩哔哩』、
<https://www.bilibili.com/video/BV1kYrsYQE98> (2025 年 1 月 28 日確認)
- ・ Akers, Matthew. Dupre, Jeff. (2012). *Marina Abramović: The Artist Is Present*.
- ・ Fromm, E. (1956). *The Art of Loving*. New York: Harper & Row.
- ・ Levinas, Emmanuel. (1961). *Totalité et Infini: Essai sur l'extériorité (Totality and Infinity)*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- ・ Lewis, C. S. (1960). *The Four Loves*. London: Geoffrey Bles.
- ・ Rogers, Carl R. (1957). *The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change*. Journal of Consulting Psychology, Vol. 21, No. 2, pp. 95–103.
- ・ Saltz, Jerry. (2010). *Marina Abramović's The Artist Is Present Is Exactly What It Claims to Be*. New York Magazine, 28 March 2010. Available at:<https://nymag.com/arts/art/reviews/66161/>.
- ・ Sartre, Jean-Paul. (1943). *L'Être et le néant (Being and Nothingness)*. Paris: Gallimard.
- ・ Sun, Lian. (2025). *Holy Feces*.